

氏名	LIU YANG
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 7425 号
学位授与の日付	令和 7 年 9 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文の題目	日本語の会話における接続詞「で」について
論文審査委員	教授 (主査) 堤 良一 教授 宮崎 和人 准教授 中東 靖恵 准教授 久保薗 愛

学位論文内容の要旨

本論文は、日本語会話において高頻度で使用される接続詞「で」について、その成立から現代に至る通時的変遷と、日本語教育への応用という二つの側面から総合的に検討することを目的とする。従来、「で」は「それで」の省略形と見なされ、独立した研究対象として十分な注目を集めてこなかった背景がある。本研究は、文法化理論及び談話分析の枠組みを理論的支柱とし、複数の大規模コーパス、具体的には『日本語歴史コーパス』、『昭和・平成書き言葉コーパス』、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』、そして『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を活用した実証的アプローチを採用する。

第一部「通時的な記述」では、「で」の歴史的発展を多角的に論じる。まず第 2 章では、『日本語歴史コーパス』を用い、近世後期から明治期における「で」の成立過程を分析した。その結果、「で」は「そこで」からではなく、主として「それで」が文法化する過程で派生したことを明らかにした。この文法化は、指示詞「ソレ」の指示性の意味漂白、音韻的弱化(例:「そいで」の出現)、語用論的機能の強化、主観化・間主観化の進行といった複数の要因が関与する複雑なプロセスであったと結論付けた。第 3 章では、『日本語歴史コーパス』及び『昭和・平成書き言葉コーパス』を用い、大正・昭和前期における「で」の意味・機能の拡張を検証した。この時期、「で」は特に「添加-促す」機能が顕著に増加し、連続使用のパターンや文間・節間といった統語的位置の多様化が見られ、談話標識としての性格を一層強めたことを実証した。第 4 章及び第 5 章では、近代(『日本語歴史コーパス』、『昭和・平成書き言葉コーパス』使用)及び現代(『BTSJ 日本語自然会話コーパス』使用)日本語会話における「で」の文脈展開機能を佐久間(2002)の分類枠組みを援用しつつ分析した。近代では「話を進める機能」が中心的であったのに対し、現代では「話題開始機能」「話題継続機能(話を深める機能、話を変える機能、話をうながす機能、話を戻す機能、話をはさむ機能等)」「話題終了機能」という 7 つの多様な機能を担うことを具体的な用例と共に示した。特に「で」は「それで」「そこで」と比較して最も「相互行為指向」が強く、指示性が弱いという特徴が、その多機能化の背景にあると考察した。第 6 章では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の日本語母語話者データを用い、現代日本語会話における「で」のフィラー的使用について検討した。その結果、「で」は単なる接続詞的用法に留まらず、「談話構造化用法」が最も多く、さらに文脈によっては「フィラー的用法」としても機能しうるという、機能の連続体として捉えるべきであることを論じた。

第二部「日本語教育への応用」では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』のデータを中心に、日本語学習者による「で」の使用実態とその教育的含意を探求した。第 7 章では、学習者の母語・学習環境

別（国内自然/国内教室/海外）、及び日本語能力レベル別に「で」の使用頻度や出現位置を分析した。国内自然環境の学習者は母語話者に近い使用傾向を示す一方、他の環境の学習者や初級レベルでは使用が著しく少ないことが確認された。また、学習者の「で」の使用は、母語話者と比較してテ・デ形の後の出現が少ないなど、統語的側面でも差異が見られた。第8章では、文脈展開機能の観点から上級学習者の「で」の使用を詳細に分析した。その結果、学習者は「話を進める機能」に極端に偏重し、母語話者に見られるような多様な文脈展開機能を十分に活用できていない「機能レパートリーの狭小化」という課題が浮き彫りになった。この原因として、多くの教科書で「で」の機能に関する詳細な解説が不足していること、音声的特徴（短さ）による知覚の困難さ、母語からの直接的な転移の難しさ、そして「で」が持つ談話管理機能の複雑さなどが複合的に影響していると考察した。

結論として、本研究は接続詞「で」が明治後期に「それで」の文法化により成立し、その後、意味・機能の拡張、文脈展開機能の多様化、フィラー的用法の出現といった段階を経て現代に至る通時的変遷を包括的に解明した。さらに、日本語学習者の使用実態分析を通じて、習得上の困難点とその要因を具体的に特定し、教育的示唆として、「で」と「それで」の機能差の明確な指導、多様な使用場面を提示するインプット強化、そして「で」が持つ幅広い談話管理機能の体系的な教授の必要性を提言した。本研究は、「で」という一見小さな言語形式を多角的に分析することで、日本語学における文法化研究、談話・会話研究、そして日本語教育実践の各分野に対し、理論的・実証的な貢献を果たすことを目指したものである。今後の課題としては、他の接続詞との比較研究、音声データに基づく韻律分析、提案した指導法の効果検証などが挙げられる。

論文審査結果の要旨

審査会は、6月9日（月）15:00～17:00 535研究室において行われた。公開審査であり、1名の聴衆、4名の審査員で行われた。

まず、申請者から20分間で本論文の概要の説明および業績の説明が行われた。そのうえで、専門委員の久保薗准教授→副査の中東靖恵准教授→副査の宮崎和人教授→主査堤良一教授と、質疑応答を20分ずつ行った。

それぞれの教員からは次のような指摘、コメントが寄せられた。

1. まず、本論文はかなりの大部なものであり、構成もしっかりとおり読みやすく、一定の水準を超えるものである。特に次の点が新規な点として高く評価される。

- a. 「で」の歴史的な変遷を丁寧な作業にあぶり出したこと。
- b. その中で、「で」が「そこで」「それで」のいずれから発展したかを、論理的な文章により、明晰に明らかにしたこと。
- c. 同時に、接続助詞「～で、～～」からの派生の可能性を説得的に否定することに成功していること。
- d. フィラーとしての「で」の存在を発見したこと。
- e. 日本語教育に資する資料および観点を提供していること。

2. 一方、次のような点が問題点として指摘された。

業績目録の書き方に問題がある。公刊した論文だけが載せてあるが、投稿中論文の情報や、口頭発表を入れるべきであった。

山田孝雄の説の紹介を正確に行ってほしい。

研究史を文章論的研究期と談話分析的研究期に二分できるだろうか。文章にせよ、談話にせよ、結束性や話の流れに関する機能の研究があり、それとは別に（談話ではなく）対話に特有の機能の研究があると考えるべきではないか。

誤字脱字が多い。急いで書いたように見受けられる。資料自体の読み込み、資料の性質の理解がやや不足している感が否めない。出現したということと、習得しているということは異なっているのではないか。

保科孝一（2001）はおかしい。保科（1911）、橋本進吉（1983）も同じ。先行研究の年代に関する記載ミスが複数見つかった。資料の問題、江戸後期なので江戸語資料がほとんど、明治大正あたりのコーパスは東京以外の人が入っている。BTSJの属性は→コーパスの説明が必要資料の連続性に留意する。「音韻的弱化」は「音的弱化」では？

文体が硬いジャンルでは文法変化は起こりにくいと言い切ってもいいのか。「で」が最初から文脈を指示するような用例があるのはなぜか。

文法変化を論じるにあたり、小柳智一氏の研究が抜けている。重要な研究なので見ておくべきでないか。大量のコーパス資料を用いているが、コーパスの情報が記載されていない。

コーパスの規模が考慮されていない。例えば明治期50、大正期50であったとしても、コーパスの規模の記載がなければ、同じ50として扱うことが出来ない。前半で市川、後半で佐久間を使用した

のはなぜか。一連の事態の継起を滑らかに繋ぐ談話標識とはどのようなことか。「でね」「でさ」等はどのように考えるのか。結論として、「で」の修得に母語の影響はないとしているが、それはなぜか。考察が不足しているように見受けられる。

以上のような問題があるものの、本論文の内容、主張、新規の事実の発見は非常に充実しており、これらの問題点が、論文の本質的な価値を損ねることはないということで、審査員全員が一致した。本論文は岡山大学の博士論文として世に出しても恥ずかしくないものであると、審査員全員で判断した。